

第18号

2022年
6月発行

CONTENTS

「歴史的典籍NW事業」から「データ駆動による課題解決型人文学の創成」へ
人間文化研究機構 機構長

木部 暢子 ①〜③

料紙分析に期待すること

国文学研究資料館 機関研究員

松原 哲子 ④〜⑤

歌論歌学研究と古典籍の

デジタル画像データベース

埼玉大学大学院人文社会科学部研究科 准教授

館野 文昭 ⑥〜⑦

日本古典籍くずし字データセットをめぐ
る一つの取り組み

国文学研究資料館 准教授

松田 訓典 ⑧〜⑨

イベント報告

古典籍共同研究事業センター

..... ⑩

こんな古典籍があった！

「拠点大学古典籍画像紹介」

..... ⑪

トピックス

..... ⑫

ふみ

「日本語の歴史的典籍の
国際共同研究ネットワーク
構築計画」ニューズレター



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター

「歴史的典籍NW事業」から

「データ駆動による課題解決型人文学の創成」へ

人間文化研究機構 機構長 木部^{きべ} 暢子^{のぶこ}



二〇一〇年三月に日本学術会議から「提言 学術
の大型施設計画・大規模研究計画―企画・推進策の在
り方とマスタープラン策定について―」が公開され
ました。これは、日本における学術の「大規模研究」の
確立のために、日本学術会議が中心となってその基
本的な考え方を取りまとめたもので、後半には七つ
の分野（すなわち人文・社会科学、生命科学、エネ
ルギー・環境・地球科学、物質・分析科学、物理学・工
学、宇宙空間科学、情報インフラストラクチャー）ご

との大型施設計画・大規模研究計画のリストとその説明が掲載されています。すべての学問分野にわたって大型計画のマスタープランが策定されたのはこれが初めてのことで、人文・社会科学分野では、三件の大規模研究がリストアップされました。その一つが「日本語の歴史的典籍のデータベースの構築」(二〇一〇～二〇二二年度)です。現在の「歴史的典籍NW事業」の最初の形です。

私はこの少し前から日本学術会議の連携会員になっていましたので、右記の「日本語の歴史的典籍」の提案書作成のための話し合いに何度か出席する機会がありました。私はこの課題の作成に直接かかわってはいませんが、一〇年間で一〇〇億円を超える研究が対象という報告を会議で聞き、人文系にも大規模研究の時代が来たのだと思ったことを覚えています。過去から現在に至る日本語資料のデータベースを構築しようとするれば、一〇〇億円ではとても足りませんが、マスタープラン二〇一〇に掲載されたことにより、「日本語の歴史的典籍」は日本におけるデジタル・ヒューマニティーズ研究の第一歩と位置づけられることになりました。

このあと、この研究課題は科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会によるロードマップ二〇一二の「一定の優先度が認められる計画」の一つにリストアップされ、さらに大規模学術フロ

ンティア促進事業へと引き継がれて、現在、国文学研究資料館の「歴史的典籍NW事業」(二〇一四～二〇二三年度)として実施されています。

一方、私は二〇一〇年四月に国立国語研究所に異動し、当時の今西祐一郎国文学研究資料館館長の依頼で古典籍共同研究事業センターの事業実施委員会(現センター運営委員会)委員を務めることになりました。その後もセンターの評価小委員会委員、日本語歴史的典籍ネットワーク委員会委員を担当し、この事業に外部の委員として関わってきました。考えてみれば、二〇一〇年から一二年間「歴史的典籍NW事業」と何らかの関係を持ちながら歩んできたような気がします。そして今年四月からは、人間文化研究機構長という立場でこの事業に関わることになり、何か不思議なものを感じます。

「歴史的典籍NW事業」ホームページによると、本事業では現在、歴史的典籍二十二万五千点の撮影を終えたということです。目標の三〇万点の画像の公開も近々実現することと思います。次は、この事業を後継プロジェクトの「データ駆動による課題解決型人文学の創成」へどうつなげていくかです。大規模データからこれまで予測不可能だった、あるいは予測もなかった新しい展開を生み

サンプルID	前文脈	キー	後文脈	語彙集読み	語彙集	レコスター	書名/出典
PR13_00151	で悩まされることあまりないからです。#また、あの館が少なかったため	あまり	驚かないことありがたいことです。#これなら水車が充分に流らないうちでも	アマリ	余り	出版・書籍	ザ・ディカス
OM15_00004	の方は。#それで病のは事起しているの、現場のところを	余り	見えないと。#現場の人が、これは聞かせんならぬとか	アマリ	余り	特定目的・国会会議録	国会会議録
LRq7_00033	でカリスマ的存在の、いわば、男の座。#翔#はい、一応ですね、	あんまり	、木見津のつっけカリスマ的存在を誇ったと書いてあるもん、で、よく、先輩から	アマリ	余り	図書館・書籍	改心
0001_10146	どこか僕んでもう見え。#花田勝氏は現役の頃と見た目は	あまり	変わっていないので今相模を取るとお兄さんの方が勝つかも。	アマリ	余り	特定目的・知恵袋	Yahoo!知恵袋
PS49_00550	「そなんだ」#いや、そう言われてみれば、俺も	あんまり	聡明から中絶のやっつることとか、聞かないはな。#はい！	アマリ	余り	出版・書籍	昔書、ある男に...

図 検索アプリケーション「中納言」による「余り」の検索例 (BCCWJより)

<http://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>

出すのがデータ駆動です。そのためには、現在、画像データとして公開されているくずし字の文章をデジタル・テキスト化する必要があります。

じつは、すでにAI技術を活用したくずし字自動認識の研究が始まっていると言います(『ふみ』第一三号、二〇二〇年一月)。もしくは、くずし字がデジタル・テキスト化されれば、国立国語研究所が公開している形態素解析用辞書Unidicをテキスト分析に活用することができます。Unidicは上代語から近現代語までに対応した形態素解析用辞書で、各種異形態——例えば「大きい／おおい」といった「漢字／かな」表記や「あま／あんまり」といった異形態、

「書く／書か／書き／書い／書け」といった活用形等に対応した設計になっています(図)。今後、方言の形態素解析辞書の開発や小学館の『日本国語大辞典』とのリンクも進める予定なので、Unidicを導入すればデータ駆動の質は格段に高まります。

また、「データ駆動による課題解決型人文学の創成プロジェクト」では、文字情報だけでなく、書物に保存されている植物のDNAや書物に付着した人間の髪の毛、手垢などのマテリアルとしての書物情報も研究対象として設定されると言います(同プロジェクト、ホームページより)。このような視点により、これまでになかった新しいタイプの異分野融合研究が生み出されていくことは間違いありません。

これらの研究は、国文学研究資料館に新設された「古典籍データベース駆動研究センター」が母体となり、実施されることと思います。人間文化研究機構では、国文学研究資料館のこのセンターと他の五機関のデータベース構築事業を連携させる形で第四期のデジタル・ヒューマニティーズを推進していく予定です。データが多ければ多いほどデータ駆動の精度はあがり、デジタル・ヒューマニティーズの質も高まります。国文学研究資料館がその牽引役となることを期待しています。

料紙分析に期待すること

現在、高精細デジタルマイクロスコープVHX8000によって、近世期に刊行された草双紙について、料紙分析をおこなっている。

草双紙研究では個々の作品について本文や装訂から刊年を推定した上で、各年代の質の違いや、普遍性がどこにあるのか等の検討がされる。しかし、抛りどころとなる情報は基本的に作品が初めて世に出た際のものであつて、後摺本や再板本の年代を特定する材料にはならない。世に送り出された草双紙が、その後どのように繰り返し刊行・販売されたのかについて実態を明らかにすることは非常に難しい。現代の出版物と同様、草双紙もまた新作としての刊行後、一部は定番作品として刊行され続けたと見込まれる。現存資料をみても、装訂等から後摺本だと推定されるものが一定数含まれる。黒本青本（初期の草双紙）では、元の装訂を留めているのは後摺本の方が多い。また、昔話物など長年に亘って需要があったと考えられる草双紙の中には再板された例もあり、草双紙の享受の実態を探るには後摺本や再板本がいかに世に送り出されたのかを明らかにしていく必要がある。

これまでの調査の中で、本自体の状態はひどくないのに、摺りが悪く、文字が読みづらい草双紙に遭遇したことがある。「この昔話

は繰り返し刊行されたんだ。今も読まれているのだから、当然商品価値を保ち続けたのだ。」と納得した。一方、別の機会に、ある年の板元の新板目録のリストに掲載された草双紙が複数、揃って同じ年に後摺本として販売されたとおぼしき例にも遭遇した。それらは、初摺の時とは別様式の題簽をお揃いで作り直して表紙に貼付したと判断される装訂を有している。定番作品が繰り返し刊行されたというパターンではなく、内容の如何に関わらず全作揃って再摺・販売されたという可能性を探るべき事例といえる。再摺の時期が明らかになれば、草双紙研究のめばしい材料となるが、題簽に配された「寿」「富」といったおめでたい一字を根拠に年代を絞り込むことはできない（注1）。

この状況を打開する可能性があると大いに期待し、取り組んでいるのが料紙分析である。草創期から末期までの草双紙の料紙を分析し、その質の変遷を具体的に整理することができれば、先に挙げた異なるパターンの後摺本の刊行事情について考えていく新たな材料が入手できる。また、各年代における同時代の様々なジャンルについても料紙分析をすることによって、江戸の地で生まれたはかない出版物が、商品的価値や書籍としての格式の面で、どのように位置するものとして誕生し、展開していったのかを追うこと

国文学研究資料館 機関研究員

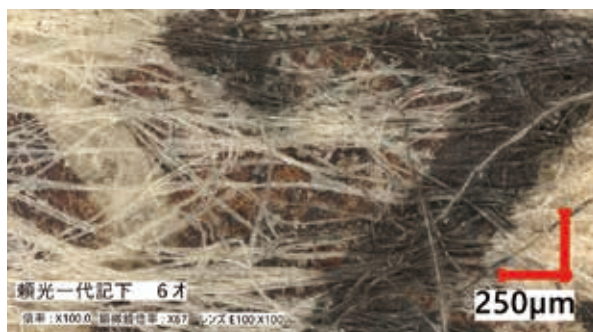
松原 まつばら
哲子 のりこ

も可能である。以上のような期待の下、現在、国文学研究資料館蔵の草双紙の悉皆調査を目標とし、調査に取り組んでいる。草双紙の伝本は保存状態が様々で、刊年等の情報を備えない場合も多い。そのような資料は料紙分析をしても結果を草双紙の流れに配置することが困難である。そこで、様々な保存状態の資料を評価する上で基準となるデータを構築することを将来的な目標に据え、まずは、館蔵の草双紙の中で、基準とするにふさわしい資料を選んで料紙分析し、その結果と対照しながら調査の範囲を広げ、整理していくと目論んでいる。

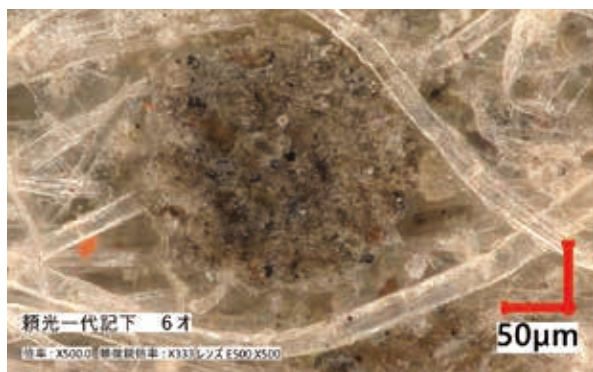
ここまで草双紙の話ばかり取り上げてきたが、あらゆる古典籍について同様の可能性があるものと見込んでいる。実際、高精細マイクロスコップを積極的に活用した研究成果も既に示されている(注2)。内容を丁寧に見解き、原本からの情報を汲み取っていく作業を重ねても、なお残る課題や、証明していくべき仮説について、打開していくことのできる材料を得る可能性が、料紙には秘められている。文学研究において何より大切な情報である本文と絶対に離れ離れになることのない本文料紙から得られる情報が、研究対象に対するより深い理解や正しい評価につながるものと確信している。

(注1) 拙稿「鱗形屋根絵外題考」(『近世文芸』第八七号、二〇〇八年一月)参照。

(注2) 『書誌学』第一九巻、特集「紙のレンズから見た古典籍」、二〇二二年二月、勉誠出版。



【2】「ま」字左側部分レンズ倍率100倍。紙の材に由来する植物片の上に印刷されている。圧力に差が生じたか、摺の濃さに差が生じている。



【3】「ま」字左下部分レンズ倍率500倍。墨点がまとまって存在していることが確認される。紙の材として反古が使用されたことを示すとみられる。



【1】『頼光一代記』下(ナ4-656) 六丁表(部分)レンズ倍率20倍で観察すると、着色された繊維や毛髪のほか様々な夾雑物がみえる。

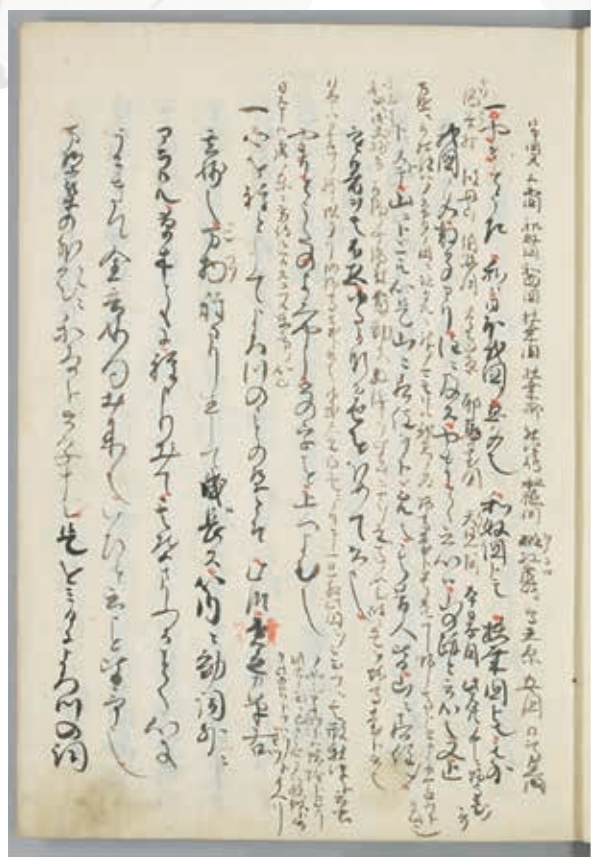
歌論歌学書研究と古典籍のデジタル画像データベース

埼玉大学大学院人文社会科学部 准教授

たての
館野 文昭
ふみあき

新型コロナウイルス感染症の流行により、古典籍の原本調査をかつてほど自由に行いづらいついた状況となった今般、日本文学研究を進めるに当たって、新日本古典籍総合データベース等の諸データベースで公開されている古典籍のデジタル画像は非常に重要なものとなっている。

画像が公開されている古典籍の中には、影印未刊行ながら研究



伝上冷泉為和筆『古今聞書』(大関八四六)(広島大学所蔵)
<https://doi.org/10.20730/100311967> 12コマ目

史上意味のある資料も少なからず含まれている。一例を挙げれば拙著『中世「歌学知」の史的展開』(花鳥社、二〇二二)第十一章で取り上げた広島大学所蔵伝上冷泉為和筆『古今聞書』(大関八四六)である(上図)。同書は飛鳥井雅親『蓮心院殿説古今集註』の一伝本であるが、その行間の書入れには他書に見えない室町期冷泉家当主の注説と思しき内容が含まれており、冷泉家歌学の展開を考える上で貴重な資料である。二〇二二年四月現在、同本は新日本古典籍総合データベースで画像が公開されており、どこからでもその書入れの内容をチェックすることが可能となっているのは有意義なことである。

さて、新日本古典籍総合データベースでは一書目につき一伝本だけではなく、写本の場合は多くの伝本の画像が公開されており、諸機関で公開される画像データベースと併せて、諸本文を比較しやすい状況が整備されている。稿者は主に歌論歌学を対象として研究を行っている者であるが、歌論歌学の研究においてもこの

状況は有益である。

風聞書房刊『日本歌学大系』は多数の歌論歌学書を収め、歌論歌学研究において必須のツールとなっている。しかしながら、ある歌学書の本文を参照するに当たって、『日本歌学大系』の本文だけでは不十分なケースもある。というのは、諸本に複数の系統があった場合、系統によってその本文が全く異なる歌学書も少なからず存在するのである。その場合、必ずしも『日本歌学大系』所収本文をもってその歌学書の本文を代表させる訳にはいかないこともある。

その一例が『愚秘抄』である。同書は鵜鷺系歌学書と呼ばれる定家仮託の一群の書のうちの一であるが、諸本による本文や内容の異同が大きいことが知られている。拙稿『『愚秘抄』諸本研究の諸問題——現状と課題をめぐって——』（『国文学研究資料館紀要』文学研究篇46、二〇二〇年）でも整理したとおり、先行研究はその諸本を大きく一巻本と二巻本とに分類している（二巻本はさらに分類される）。『日本歌学大系』所収本は一巻本であるが、データベースで公開されている画像を確認しても、その殆どが二巻本系統の本文に属するものである。我々は『日本歌学大系』本文を研究の際に第一に参照しがちであるが、それが歴史的に参照されてきた『愚秘抄』本文とは異なる可能性もあるということである。

なお、日高愛子氏『飛鳥井家歌学の形成と展開』（勉誠出版、二〇二二年）第一章第二節「雅康の『飛鳥井流切紙口伝』」が既に指摘しているけれども、飛鳥井雅康（一四三六―一五〇九）の文明十八（二四八六）年奥書を持つ「飛鳥井流切紙口伝」所収の「三木」に関する秘事は『愚秘抄』本文から大いに影響を受けている。紙幅の都合により具体的な本文引用は割愛するが、「飛鳥井流切紙口伝」と明確な本文的影響関係を指摘できるのは、『日本歌学大系』所収の一巻本ではなく版本など二巻本系統の本文である。これもデータベースを利用することにより確認可能である。この事例からも、中世歌学研究において『愚秘抄』本文を参照する場合、少なくとも『日本歌学大系』のみを参照したのでは不十分であることは明らかである。

このように『愚秘抄』を参照するに当たっては、『日本歌学大系』本文だけでなく、諸本の本文を確認すべきなのであるが、その作業はデータベースを活用することで効率よく進めることが出来るのである。

今後さらに多くの古典籍の画像が公開されることにより、『愚秘抄』のような「やっかい」な諸本状況を有するテキストの研究にも、多くの研究者が参入しやすくなるものと思われる。

日本古典籍くずし字データセットをめぐる一つの取り組み

国文学研究資料館 准教授 松田 まつだ 訓典 くにのり

これまでこの「ふみ」においてもたびたび言及されているように、当事業ではROIS-IDS人文学オープンデータ共同利用センター(CODH)の協力のもと、「日本古典籍くずし字データセット」の作成・公開に取り組んできました。二〇一九年十一月には、

四十四点の古典籍から四三二八文字種一〇八万六三二六文字におよぶ字形データセットの公開に至っています。[\(http://codh.rois.ac.jp/char-shape/\)](http://codh.rois.ac.jp/char-shape/)これら字形データセットは、日本古典籍データセットで公開されるデジタル化された古典籍を中心に、翻刻テキストを制作する過程で生まれるくずし字の座標情報などを、機械のための学習データや人間のための学習データとして提供されています。これを踏まえて、機械学習分野では二〇一九年に行われた世界的な機械学習プラットフォームであるKaggleのコンペティション(<https://www.kaggle.com/c/kuzushiji-recognition>)をはじめ様々な取り組みが行われていますし、つい先日その成果を活かしてA Iくずし字認識アプリ「みを」もリリースされました。[\(http://codh.rois.ac.jp/miwo/\)](http://codh.rois.ac.jp/miwo/)一方、それ以外の取り組みとしては「ふみ」十六号で報告された「史的文字データベース連携検索システム」(史的文字DB)があります。これには当館から上述のデー

タセットのうち当館所蔵の四十一書誌三九八六字種八四万七九一八字分の文字データを提供しています。本稿ではこのシステムに当館の情報を表示するために提供している裏側を少し紹介したいと思います。

当センターでは二〇二〇年に「国文学資料館字形検索β」

(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/jikei/>)というサイトを公開しました。

ここでできることは非常に単純です。右上にある検索窓に探したい文字を入力すると、データセットの中から当該文字の字形データを一覧表示できます。

(図1)検索結果の画像をクリックすれば、その字形の存在する詳細ページを表示できます。(図2)あるい

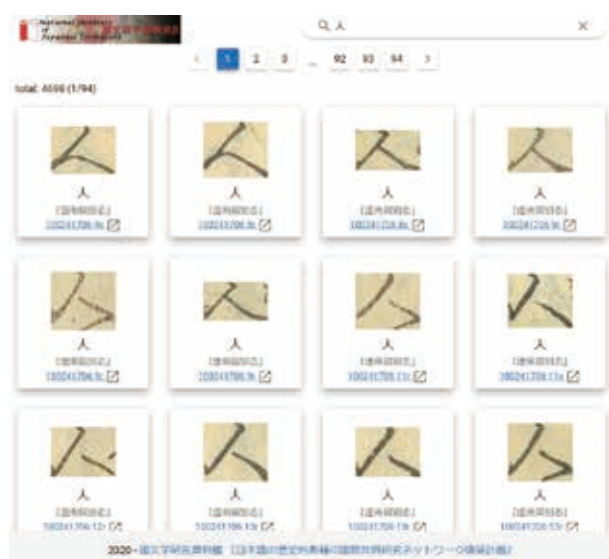


図1

は、書名の下に付されている当館の書誌IDとページ番号のところをクリックすれば、「新日本古典籍総合データベース」上で当該書誌の確認ができます。ですが、この機能はいわばおまけのよう

なもので、そもそも公開元であるCODHでも文字の検索一覧表示機能は提供されています。

このサイトは他のシステムとの連携のためにどのようなデータの提供が可能であるのか、ということの実験を主目的として作成しました。その一例が、先述の「史的文字DB」へのWeb APIの提供です。つまり「国文研でこの文字はどんなものをもっているか？」と問い合わせを受けたときに、文字とそれに関連する情報（書名や位置情報など）のリスト、またその文字画像を送り返す仕組みになっています。

もう一つ小さな例を紹介しましょう。こちらですでにたびたび紹介されているのでご存知の方も多いと思いますが、近年デジタルアーカイブの分野では、高精細な画像をウェブ上で公開するに

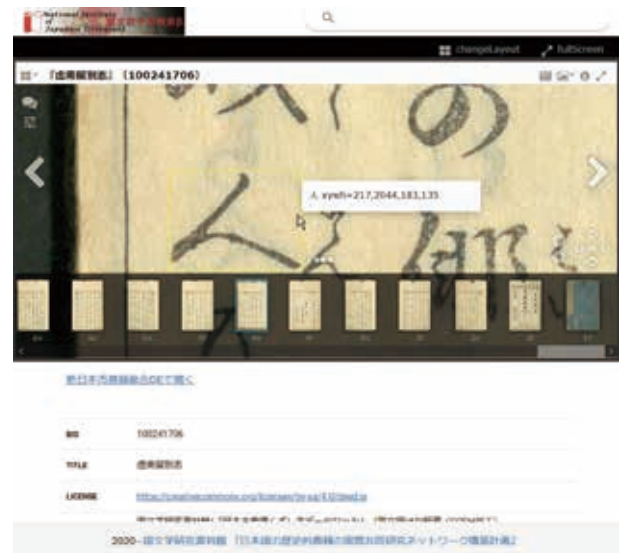


図2

あたり、IIIFという共通の約束事にしたがって提供することで、国際的にも相互利用しやすい形での画像共有が進められます。その中で、あるひとまとまりの画像（たとえば書物）がどのような配列であるのか、どのような付加情報をもっているのかを表現しているマニフェストファイルを提供するManifestation APIを利用して、特定の文字に注釈をつけたマニフェストファイルを提供することができます。たとえば図3では『虚南留別志』（書誌ID 100241706）の「人」間という文字に注釈をつけたマニフェストファイルを使つて、二種類の文字を強調表示しているところからです。もちろんこのページだけではなくこの書誌のすべてのページで同じように表示されます。

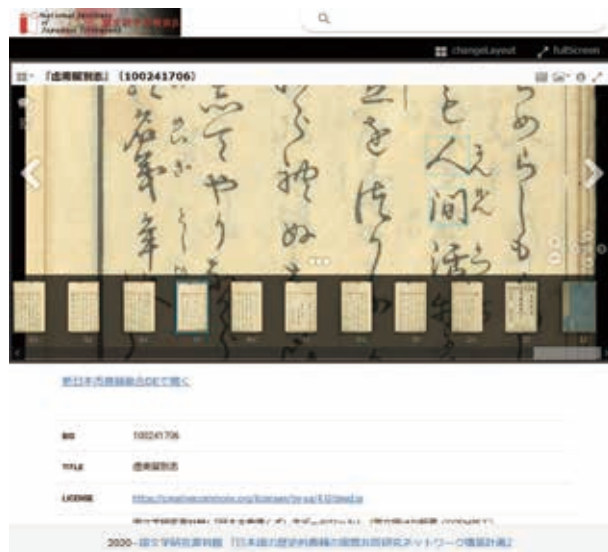


図3

新しいデータベースを作ったり研究ツールを作ったりする際、このデータと一緒に提供されていれば便利なのに、と感じることは多々あると思います。そういったアイデアの小さな積み重ねの場の一つとして、当サイトが活用できればと願っています。

第七回日本語の歴史的典籍国際研究集会・報告

古典籍共同研究事業センター

令和三年十一月十一日(木)十八時から、昨年に引き続きオンラインにより、第七回日本語の歴史的典籍国際研究集会を開催しました。第七回のテーマは、古典籍の教育への利活用を考える「歴史的典籍と教育―デジタル画像を教育に活用する」とし、三つのセッションを設定しました。

第一セッションでは「デジタル社会における教育の取組等」として、同志社大学山田和人教授により、古典の持つ遊戯性、パロディ性などの切り口で教材としての利用の可能性に触れた「古典教材の未来を切り拓く」が報告され、次いで、人文情報学研究所永崎研宣主席研究員から「データ駆動型人文学」の担い手を探る」と題し、人文学研究の新たなスタイルであるデータ駆動型人文学の担い手について、大学・大学院教育の例を示しながら育成に向けた取組が、また、豊田工業高等専門学校早坂太一教授からは「くずし字を読むエッジAIの開発」として、AIを用い画像からくずし字を認識する研究の最前線が報告されました。

第二セッションでは「具体的実践等の取組」として、ゲート大学ミヒャエル・キンスキー教授から「ドイツにおけるデジタル・ヒューマニティーズと日本学における応用」と題し、安藤広重の江戸時代の地図『御江戸絵図』を利用し歴史を検索、説明文を書くなどのグループ学習の様子が、次いで、信州大学速水香織准教授、白百合女子大学宮本祐規子准教授、愛知学院大学中村綾講師により「古典と地域を結ぶICT活用教育の可能性

ドイツにおけるデジタル・ヒューマニティーズと日本学における応用
Michael Kinski, Frankfurt



―楽しみながら学ぶ「木曾路双六」―ことわざ絵合わせ」と題し、ICT教育、ギガスクール構想を視野に入れた双六やカルタなどの伝統的な遊具による学習ツールの開発状況が紹介されました。さらに、成蹊大学平野多恵教授から古典とエンターテインメントを掛け合わせたプロジェクトベースドラーニングの可能性について「江戸時代の古い本『清明歌占』を用いたアクティブラーニングと和歌占いの普及」と題し報告がありました。

第三セッションでは、NW事業を継承する新しい時代的大型プロジェクト「データ駆動による課題解決型人文学の創生」について当館海野圭介教授(大型研究計画設置準備室長)から、その基本構想等が報告されました。

本集会の当日ライブ配信視聴回数は七百三十八回を数え、最多同時接続視聴者数は百二十人、イギリス、ドイツ、アメリカ、韓国からも事前登録があるなど、古典籍の教育へ応用について研究者、教育関係者の関心の高さを伺えるものとなりました。

本集会のアーカイブ動画、発表資料は、国文学研究資料館歴史的典籍NW事業ホームページ内の特設サイトで公開しています。どうぞご視聴ください。

<https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/sympo2021.html>



『木曾路名所圖會(きそじめいしよずえ)』
(国文学研究資料館所蔵)
<https://doi.org/10.20730/200017972>
347コマ目

こんな古典籍があった！～拠点大学古典籍画像紹介～第10回

専門機関の典籍も紹介しています。

歴史的典籍NW事業では、二〇一五年度から、拠点大学における古典籍の撮影を実施しています。新日本古典籍総合データベースで公開された古典籍から、各拠点大学や専門機関おすすめの一点をご紹介します。

●お茶の水女子大学図書館所蔵『都会節用百家通』

URL: <https://doi.org/10.20730/100238335>

この図は見開き一面ですが、何の図だかわかりになるでしょうか。何と、「富士山を真上から見た図」です！

『都会節用百家通』（寛政

8年刊）は日用辞書、いわゆる節用集の類の一つですが、その9コマ目に突然これが出てきます。当時はもちろん飛行機もドローンもないわけで、山頂付近を真上から描こうという発想自体が凄いと思います。拡大すると宝永火口や大沢崩れがわかるので、実際の空撮写真と比べてはどうでしょうか。

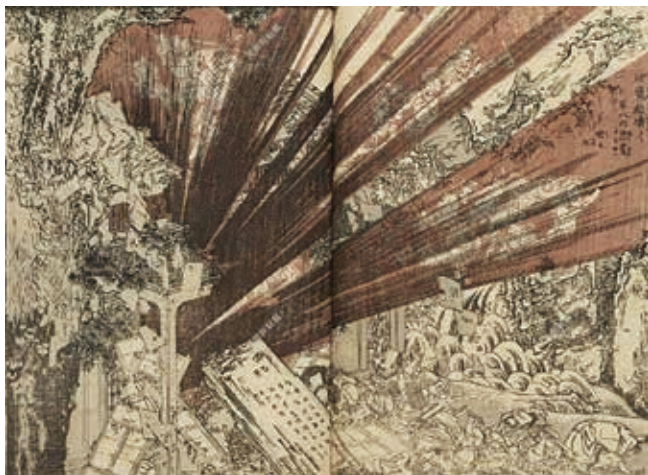


（該当部分を見る：
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100238335/viewer/9>）

●専修大学図書館所蔵『新編水滸畫傳』

URL: <https://doi.org/10.20730/100307187>

初編十巻が曲亭馬琴作、二編以下は高井蘭山作の長編読本。葛飾北斎がすべての挿絵を描いている。物語冒頭の伏魔殿から群魔が飛び出す場面には、代赭色の閃光の中に白抜きで群魔を描いた挿絵があり、浮世絵だけでなく挿絵師としての北斎の才能が伺える斬新な構図である。後摺ではこの色刷り部分は省略されるため、初摺でなければ見ることができない。また、くつきりと鮮やかに色が出ているものは珍しく、善本と言える。

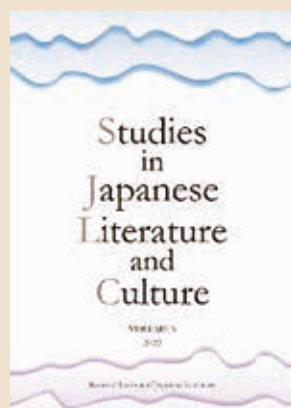


（該当部分を見る：
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100307187/viewer/40>）

※画像の転載や翻刻掲載などを希望される場合は、利用条件のページ（<https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/usage.html>）を必ずご確認ください。

英文オンライン・ジャーナル
第五号刊行

Studies in Japanese Literature and Cultureの第五号「Volume 5(2022)」を歴史的典籍NW事業のウェブサイトにから三月末に刊行しました。



<https://www.nijl.ac.jp/pages/cjproject/sjl.html> 右記URLから全冊がダウンロード可能です。個別論文のみダウンロードする場合は、各論文のPDFアイコンをクリックしてダウンロードできます。

イベント報告

■十一月一日(月)～三十日(火)、オンラインで開催された第二十三回図書館総合展に出展し、新日本古典籍総合データベースおよび関連するコンテンツの紹介、デジタル撮影についての紹介を行いました。



現在、図書館総合展に出展したコンテンツをセンターHPで公開しております。
<https://www.nijl.ac.jp/pages/cjproject/forlibrarians.html>

■五月十一日(水)～十三日(金)、第十三回教育総合展EDIIX東京が東京ビッグサイト(東京都江東区有明)で開催され、国文学研究資料館として初出展いたしました。教育関係者に向けて「新日本古典籍総合データベース」について無料で使えるデータベースであること、膨大な高精細画像を閲覧、ダウンロードできる点などを紹介し、多くの方に好評をいただきました。



新日本古典籍総合データベースのお知らせ

■《タグ》を使った翻刻の紹介
《タグ》が設定されている資料では、画像ビューワの上部にある「タグを表示」にチェックをいれると、青枠で囲まれた語句に対応する翻刻された文字を見ることが出来ます。



ふみ17号本文中の表記について
8ページ～9ページ「鵜軒文庫のひろがり」東京大学総合図書館蔵・鵜軒土肥慶三旧蔵書内の土肥慶三の表記につきましては、慶「三」と表記することもあります。一般的な表記は「慶蔵」であることを補記いたします。

ふみ 第19号は、

令和5(2023)年
1月発行予定です。

■表題の背景色は萩色(はぎいろ)です。「萩」は秋を代表する花として日本人に親しまれており、清少納言は「枕草子」のなかで「萩、いと色ふかう、枝たをやかにさきたるが、朝露にぬれて、なよなよとひろがりふしたる」と表現しています。

■本誌「ふみ」各頁の背景は当資料館蔵の『方丈記』(本阿弥光悦流の書体を模刻した嵯峨本)を利用しています。

■表題「ふみ」の書体は、石川島造船所(現IHI)創業者の平野富二が明治十二年六月に刊行し当館所蔵の「BOOK OF SPECIMENS」(活版印刷見本帳)を利用しています。

ふみ

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター
第18号

〈発行日〉
令和4(2022)年6月30日

〈編集・発行〉

国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター

〒190-0014

東京都立川市緑町十一三

TEL 050-5533-2988

FAX 042-526-8883

<http://www.nijl.ac.jp/pages/cjproject/>



『成形図説』

がご覧になれます。
携帯電話又はスマートフォンのアプリ等で、左記のQRコードを読み取りご覧ください。